

⑥ 高塚正勝氏（水晶島元島民）



私の本籍は、花咲郡歯舞村大字瑛瑠瑠（ごようまい）字水晶島（すいしょうとう）秋味場（あきあじば）というところです。昭和 11 年 5 月 11 日に生まれました。終戦当時は、国民学校の 3 年生でした。その後、2 年間だけソ連の国境警備隊と過ごし、本道に引き揚げてきました。

まず、四島の大きさですが、国後島の面積は 1,499 km²。

択捉島は国後島の倍の面積で、3,184 km²。

色丹島の面積は 250 km²ほどで、それほど大きな島ではありません。

歯舞群島には小さな島々がたくさんあります。主な島の面積ですが、多楽島（たらくとう）は 12 km²、志発島（しぼつとう）は 60 km²、秋勇留島（あきゆりとう）は 3 km²、勇留島（ゆりとう）は 11 km²、私の生まれた水晶島は 14 km²です。

北方四島には、昭和 20 年 8 月 15 日現在で、17,291 人の日本人が住んでいました。水産資源が豊かで、魚は何でも捕れました。捕鯨場もありました。

私の住んでいた水晶島は、根室半島から約 7 km の位置にあります。近いですね。納沙布岬からは目の先に見えます。海拔は 18 m くらいしかない平地です。東日本大震災のような 30 m を超す大津波がくると、島はなくなってしまいます。

当時、島には 177 世帯があり、1,000 人ほどの日本人が住んでいました。また、島全体に 325 頭の馬がいて、私の家にも 25 頭くらいの馬を自然放牧で飼っていましたが、優秀な馬は軍馬となって戦争に行っていたようです。冬になると、雪の関係で餌がなくなりますが、自然と家の周りに集まってきていました。一週間程度、馬小屋で餌を与えると元気になって野原に帰っていきます。

水晶島の主な産業は水産業、昆布です。昆布で生計を立てていました。当時は灯油を燃料とした発動機船で昆布漁を行っていました。昆布が採れるということで、ウニ、アワビも捕れましたが、当時はあまり食べませんでした。売るための魚は捕っていませんでした。自家用のためです。

島に電気はなかったので、ランプの明かりで生活していました。そのため、学校の勉強も夜はほとんどしませんでした。早寝、早起きです。電気がないことが何より大変でした。ホタテの工場では発電を行っていましたが、一般の家庭には電気は通っておりません。

気候はそれほど寒くはなく、冬は寒い日でも -7°C くらいです。雪はあまり多くありませんが、風が強いので、よく吹きだまりができていました。その吹きだまりの山を利用して、スキーをしました。近くに沼が2つあったのですが、冬になると凍ります。そこで竹スキーで遊びました。物のない時代でしたので、それでも満足していました。

秋になると、サケも捕っていました。私たちの住んでいたところは、「秋味場（あきあじば）」と呼ばれ、秋になると川にサケが遡上します。当時は棒で叩いて捕まえます。一晩で20本くらいサケが捕れることもあり、そのサケはみんなで配分していました。島の人たちはみんな親戚付き合い、人間関係は良好でした。

島には郵便局がありました。また、学校は本校と分校がありましたが人数はそんなにいませんでした。

昆布の時期になると、出稼ぎの人がたくさん来ます。出稼ぎの人の中には、島に残り、独立して昆布の仕事をする人もいたので、徐々に世帯数が増えました。それだけ島では昆布での収入が得られたのでしょう。昆布の最盛期は家族総出の作業です。当時、自分は子供でしたが、手伝いました。

前浜に網を刺すと、カレイ、アブラコ、コマイ、カニなどがかかります。

島では毛ガニは食べませんでした。毛が生えているので「毒」と言われていましたが、食べると美味しいんですね。北海道に引き揚げてきて、はじめて食べました。島にいたころは、タラバガニや花咲ガニを食べていました。

魚は、越冬用に樽に塩漬けしていました。塩だけは惜しみなく使っていました。

お米は、島ではとれません。根室から半年分くらい一度に買っていました。

島では野菜も作れましたが、トマトなどの実のなる野菜は作れないので大根、白菜などが中心です。

島には、ホタテの工場は2カ所ありました。今でも貝殻が山になって積まれています。

一番不便だったのは病気をしたときです。当時、島には病院などはありません。病気をしたときは、看護師の資格をもっていた学校の先生の奥さんに看てもらいましたが、手に負えない場合は、病院のある根室に診察に行っていました。そのような状況なので、急病で亡くなる人もいました。

飲み水ですが、山際に井戸を掘って使っていました。とてもきれいな水でした。洗濯や風呂には沼の水を使っていました。

暖房用の燃料は練炭を使っていました。島には石炭がないので、根室から持ってきていました。料理用には木炭を使っていました。いまから考えると不便ですね。以前、亡くなった母に、島が帰ったら、また島に住むかどうか聞いたのですが、「島では大変苦労したので、もう私は帰らない。」と言っていました。

昭和20年の8月下旬、ソ連兵が入ってくることが明らかになったので、多くの世帯は財産をまとめ、発動機船で根室に引っ越してしまいました。島に残ったのは、自分の家を含め、わずか25戸程度だけです。その後、島では2年ほど過ごし、ソ連の引き揚げ船で樺太の真岡に行きました。高台にある女子校に1か月ほど収容され、日本の引き揚げ船で函館まで行きました。その後、親戚を頼って根室に行きました。当時は風呂に入っていないので、シラミがたかってかゆくなります。食べ物も一日2食くらいで栄養失調です。ほんとうにひどい状態でした。函館で頭からDDTをかけられました。そのおかげで、ある程度シラミもなくなったと思います。根室に着

いて、やっと安堵した次第です。

いまだに島は戻らない。日本の固有の領土であり、皆さんにも返還要求運動に協力していただいています。なかなか帰ってこない。ロシア人は、一度住んだところは返さないという原則を持っているという話を聞いたことがあります。学校でもそのように教えているようです。ビザなし交流の際、ロシア人と話しましたが、そのロシア人からは、ロシアの領土だから日本には返さないとはっきり言われたことがあります。しかし、国際的に見ても、一度も他国の領土になったことのない日本固有の領土です。

これまで、私は8回ほど島に行きました。北方領土墓参と自由訪問です。ビザなし交流でも行ってきました。今年、新しい交流用船舶「えとぴりか」が就航しました。機会があればこれに乗船し、また島を訪問したいと思っています。写真をたくさん撮影し、皆さんにお見せしたいと思います。

<訪問校>

- 増毛町立阿分小学校（平成24年11月1日（木））



• 増毛町立増毛小学校（平成24年12月4日（火））



• 名寄市立名寄西小学校（平成25年1月31日（木））



